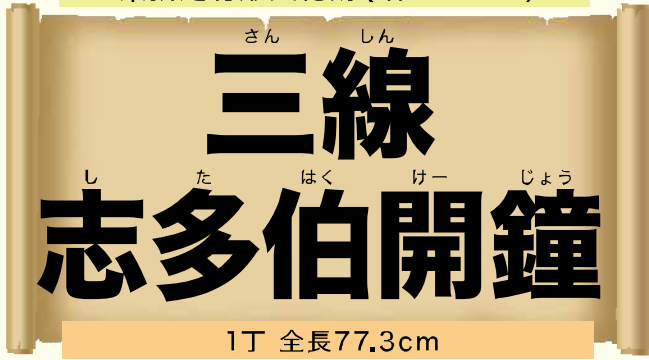


県指定有形文化財(昭30.5.23)



わあー、
きれいな三線!

野や天、心、爪の形が真壁型の特徴を良く表している三線なんだ。



最も優美な三線のかたち「真壁型」の名器



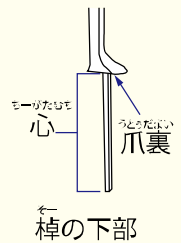
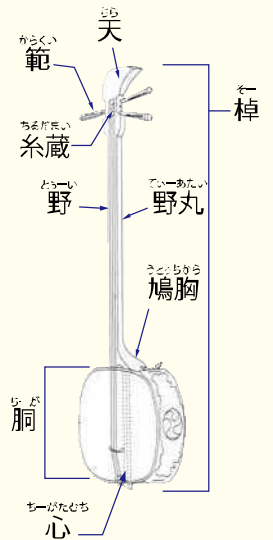
三線志多伯開鐘



天・範・糸蔵



伊江御殿



三線の7つの型の一つ真壁型の代表的なものです。

心(ちーがたむち)の表に「志多伯開鐘」、裏に「伊江御殿」と朱書きの銘があり、天(ちら)・爪の形状は真壁型の正型で、爪裏(うとうだま)のノミ型は角左ノミ極細型、心(ちーがたむ

ち)の形状は角型でなめらかになっているのが特徴です。この三線は、もともと伊江御殿の秘蔵品でしたが、大正中期頃に地元の名士が譲り受け、現在は沖縄県立博物館・美術館に寄託されています。

(写真提供:沖縄県立博物館・美術館)

県指定有形文化財(昭30.5.23)



本当にすらとして、
きれいな形の
三線だね。

開鐘は、速くまで良く響き
渡るとされる。とからつけ
られた名前だけど、「開鐘」
という名前は、真壁型だけ
にしかつけられていないん
だよ。それほど美しい音色
の三線なんだね。



三線 湧川開鐘

1丁 全長74.2cm



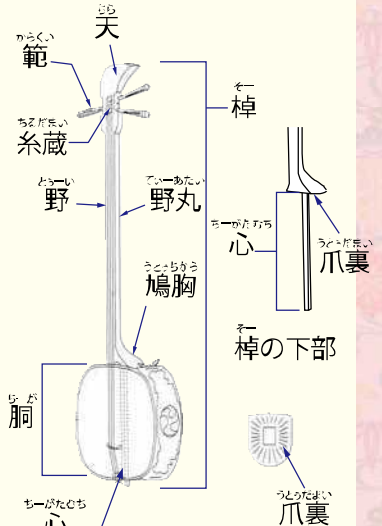
尚家に伝わる三線の最高峰「五開鐘」の一つ



三線湧川開鐘



天・範・糸蔵



心



真壁型三線。真壁型には「五開鐘」「十開鐘」と呼ばれる名器があり、王族や上流士族が愛用したといわれます。

この開鐘は、尚王家伝来の五開鐘の一つであり、三線の最高峰とされています。心(ちーがたむち)に「浦添御殿真壁里之子作、壮猶堂、湧

川開鐘」と朱書きの銘があり、真壁工匠の作品とみられています。

糸蔵(ちるだまい)が長く、優美な型です。惜しくも沖縄戦で戦禍にあい、天(ちら)は傷を受けたために作りかえられていますが、野(とーい)は無傷です。(写真提供:沖縄県立博物館・美術館)

県指定有形文化財(平6.3.15)

三線

盛嶋開鐘 附胴

1丁 全長全長76.5cm



きれいな音が出る
三線なんだね。



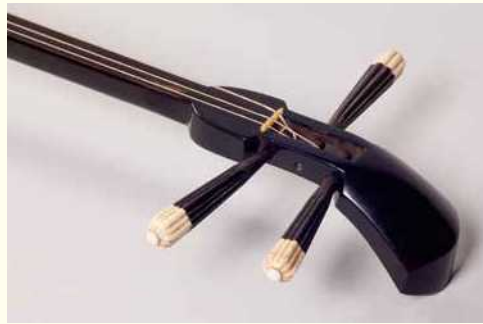
この三線の胴の内側は、良い音色を出すよう複雑な細工で凹凸が施されているよ。その凸部分には、写真にあるように、製作者と製作年代が記されているんだ。戦前に行われた三線展示会では、すごく注目された三線でもあるよ。



王家に伝わる「五開鐘」の筆頭



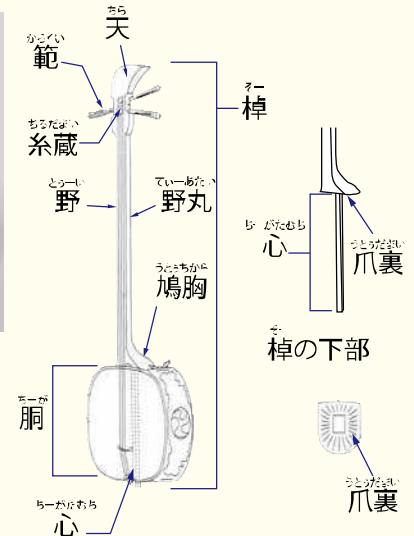
三線盛嶋開鐘 附胴



天・範・糸蔵



①心



②胴の内側(反響板)

尚家伝来の五開鐘の一つで筆頭開鐘といわれる三線で、棹は黒檀(クルチ)の上質材で出来ており、真壁型の特徴を備えた優美な形状をしています。

心(ちーがたむち)の裏側に、朱漆で「盛嶋開鐘」と記されています。胴(ちーが)木杵の材質はイヌマキ(チャーギ)で、内部に「咸豊拾年庚申八月吉日」と「渡慶次筑親雲上作」の墨書きと凹凸状の複雑な細工が施されています。

※筑は、「筑登之」の略字

製作年代は王府時代と推定され、1939(昭和14)年に首里城南殿で行われた三線展示会には、県内の名器が多数展示されましたが、この三線だけは秘蔵中の秘蔵品として出品されなかった、という伝承を持っています。

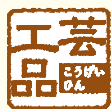
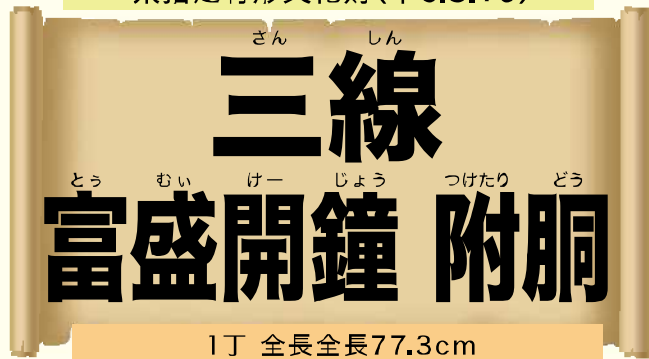
盛嶋開鐘は戦後行方がわからなくなり、1980(昭和55)年頃尚家に戻され、1982(昭和57)年に尚家第22代当主である尚裕氏から沖縄県に寄贈されました。

(写真提供: ①~②沖縄県立博物館・美術館)



とても良い三線だから、代々の所有者に大半にされたんだらうね。

棹が細めで、天、野、爪、心の形が典型的な真壁型の特徴を持つ三線なんだよ。



ハワイから戻ってきた真壁型の名器



三線富盛開鐘 附胴



天・範・糸蔵



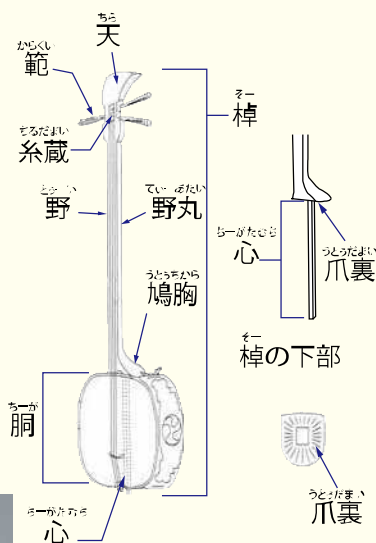
①心



②心



③心



家紋(拡大)

この大型の三線は、準開鐘の一つに挙げられているもので、三線の7つの型のうち真壁型を代表するものです。棹の材質はイスノキ(ユシギ)で、真壁型の特徴を備えた優美な三線です。製作年代は王府時代と推定され、野(とう一い)は波型になっており、糸蔵(ちるだまい)の幅はやや幅広です。心(ちーがたむち)の左側に朱漆で「富盛開鐘」と記され、右側に金文字で「上美地」と刻まれ、裏側に夏氏の家紋が

彫られています。「上美地」は「かみちゅらじ」という屋号の可能性がありますが、その詳細は不明です。

富盛開鐘の元々の所有者は不明ですが、戦前にハワイ在住沖繩2世の仲宗根盛松氏が那覇で購入しハワイに渡りました。その後、首里在住の稲嶺盛保氏に譲渡され、1986(昭和61)年に稲嶺氏から沖繩県立芸術大学に寄贈されました。

(写真提供:①~③沖繩県立博物館・美術館)

県指定有形文化財(昭30.5.23)

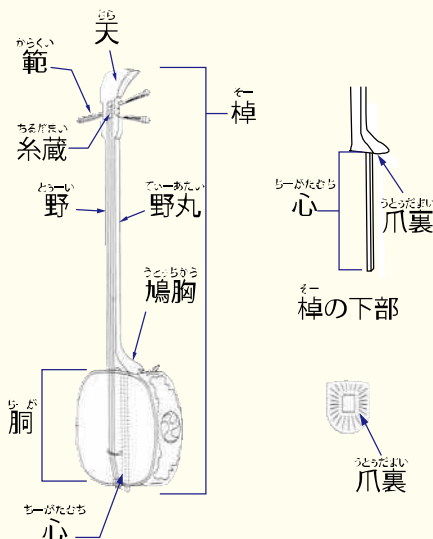
三線 翁長開鐘

1丁 全長76.7cm

沖縄戦をくぐり抜けた、「沖縄の宝」

「開鐘」とは、夜明けに遠くまでよく響きわたる寺院の鐘のことを意味します。これにちなんで、三線のうちでも、特によく響く名器には、「○○開鐘」と呼ばれるものがあります。

この三線は標準的な真壁型で、範(からくい)の先に黒の牛角をはめ、房飾りがつけられるように穴があいています。心(ちーがたむち)は粗削りで表面に凹凸があり、「翁長開鐘」と朱書き



の銘があります。

翁長開鐘は、尚瀨王(在位:1804~1834年)が愛用した名器で、王の没後に3番目の子どもである大里王子(朝教)に与えられ、1935(昭和10)年頃、現在の持ち主の先代に渡ったということです。

県指定有形文化財(昭31.12.14)

三線 江戸与那

1丁 全長80.3cm

三線の7つの型の一つで、名工・与那城の作であることから与那城型と呼ばれるものです。

伝承によると、1855(咸豊5)年に浦崎親方政種が年頭使者として江戸に上り、翌年、帰国の途中に島津家に献上したものとされています。

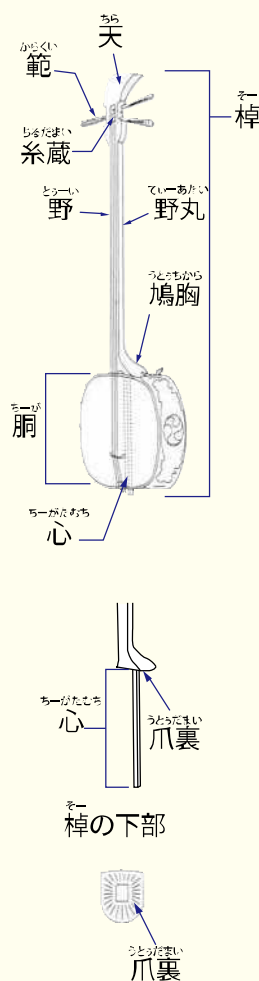
普通の与那城型より糸蔵(ちるだまい)が長いのは、道中用として予備の糸を巻き込むために寸法を伸ばしたためとの説があり、「江戸与那」と呼ばれました。また、心(ちーがたむち)に3つの穴が開いています。

この三線は、1939(昭和14)年に歴史学者の東恩納寛惇が、東京の古書市で偶然に発見し、三線供養祭が行われ沖縄郷土博物館に寄贈されました。

【収蔵機関】 沖縄県立博物館・美術館



三線江戸与那



■天・範・糸蔵



独特なデザインに見えるね。

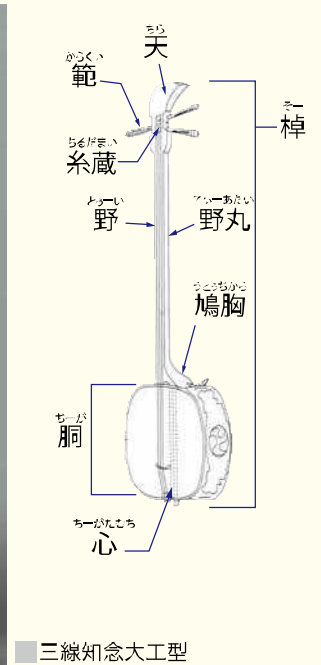
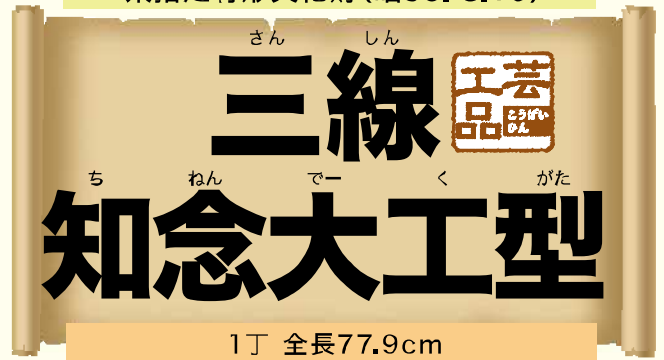
知念型は、南風原型に次いで古い型だと考えられているんだ。でも南風原型とは全く異なるデザインなので、作者のセンスを感じるね。



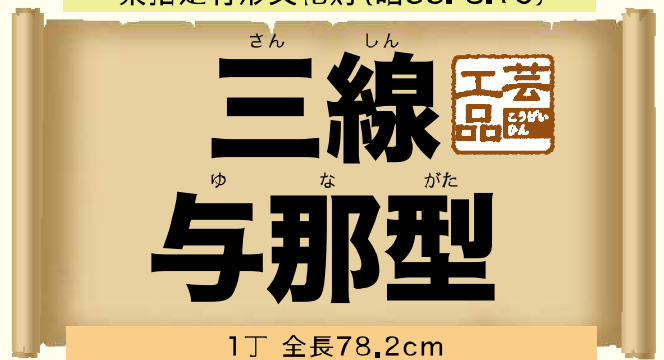
知念大工型は、棹が太目で、天(ちら)の反りが大きいのが特徴です。天(ちら)の中央にわずかに盛り上がった稜線があります。野(とーい)の下部の開きが大きく、また力強く盛り上がった鳩胸(うとうちから)を持っています。鳩胸(うとうちから)にも天(ちら)と同様の稜線が見られます。

『球陽』(1745年)の1710(康熙49)年の条に「知念なる者有り。よく三絃を造り、是の年に至り、擢んでられて其の主取と為る。」とあります。これを現代語に直すと、「知念という人物がいて、三線の製作が上手で、この年に(三線作りの)主取という役職に抜擢された。」となります。知念大工型はこの名工・知念の創作と考えられます。

(写真提供: 沖縄県立博物館・美術館)



■三線知念大工型

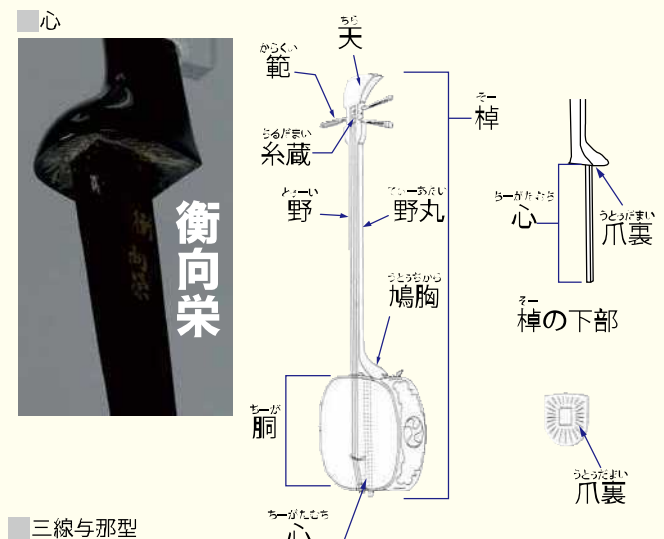


与那型は与那城型の通称で、三線の7つの型の一つです。名工・与那城が創作したことから、この名が付けられています。

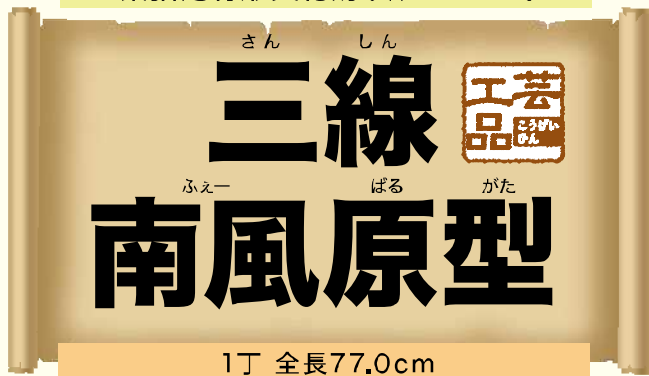
与那城は、真壁型を創作した真壁里之子と同世代の人で、真壁の弟子とも伝えられています。

この三線の特徴は、野(とーい)が糸蔵(ちるだまい)の端まで一直線で、天(ちら)は糸蔵(ちるだまい)の先から曲がり、範(からくい)の穴は表面よりも裏面に近い位置に開けられています。同じ時期に創案された真壁型と比べ、棹はより太く、糸蔵(ちるだまい)が長く、鳩胸(うとうちから)が大きめです。心(ちーがたむち)には「衡向栄」と朱書きされています。

(写真提供: 沖縄県立博物館・美術館)



■三線与那型



三線の7つの型の中で、最も古い型が南風原型で、三線作りの名工・南風原の名に由来しています。

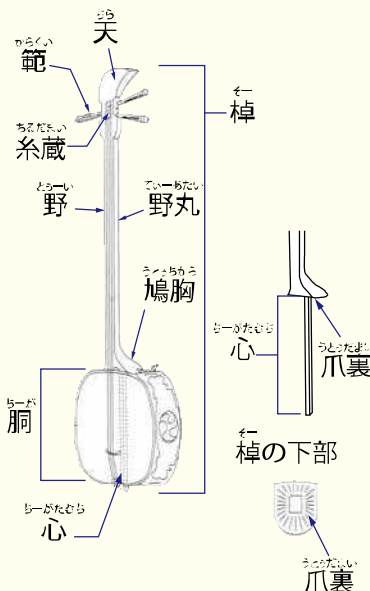
この三線は南風原型を代表するものの一つで、棹は細めで、天(ちら)の曲がり少なく、野(とら-い)の後ろの部分である野丸(てい-あたい)は下方で大きく弧を描いて曲がっています。

心(ち-がたむち)に「拝領南風原、伊江御殿」と朱書きされており、王府からの拝領品であることがわかります。もとは伊江御殿の所蔵であったと言われています。

(写真提供: 沖縄県立博物館・美術館)



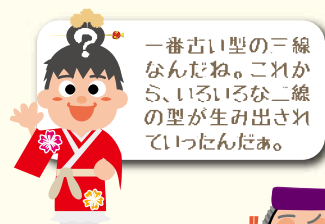
三線南風原型



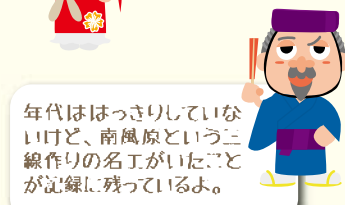
伊江御殿



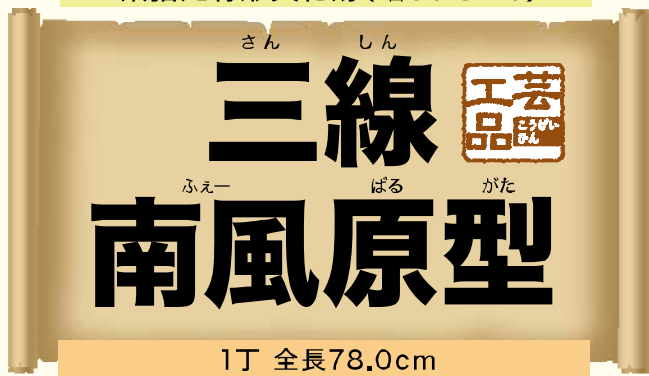
拝領南風原



一番古い型の三線なんだね。これから、いろいろな三線の型が生み出されていったんだあ。



年代ははっきりしていないけど、南風原という三線作りの名工がいたことが記録に残っているよ。



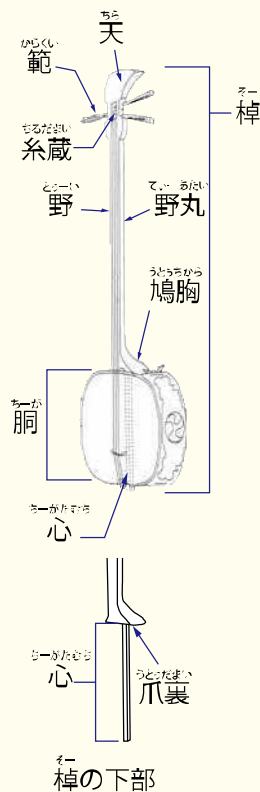
三線の7つの型の一つで、三線の原形と言われる南風原型の三線です。琉球王府の正史『球陽』(1745年)の1710(康熙49)年の条には「往昔の世、素、三絃有り。いまだ、いずれの世にして始まるかを知らざるなり。近世に至り、南風原なる者有り。よく三絃を製す。」と書かれています。これを現代語に直すと「昔から三線はあり、いつの時代から作られるようになったかはわからない。近頃になって南風原と言う人物がいて、三線を上手に製作する。」となります。この型の名称は、この名工・南風原の名に由来しています。



三線南風原型



心



天(ちら)は細めで曲がり少なく、棹は細く、心(ち-がたむち)は粗削りです。心(ち-がたむち)の正面に3個の丸穴が開けられています。

(写真提供: 沖縄県立博物館・美術館)



久葉の骨型と比べると、本当に太いのがわかるね。

久場春型は、沖縄の三線の中でも最も棹が太いのが特徴なんだ。野丸と鳩胸の区別がないのも特徴の一つだよ。



三線 久場春殿型

1丁 全長78.0cm

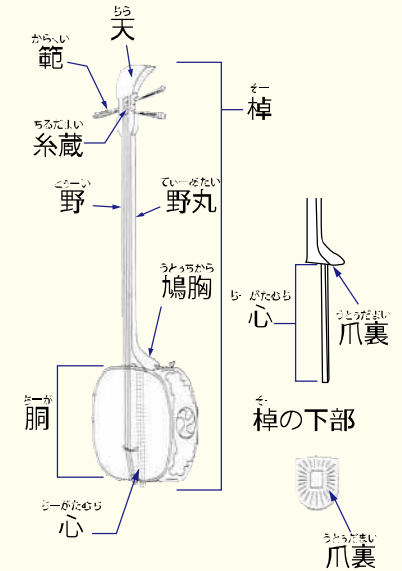
三線の7つの型の一つである久場春殿型を代表するもので、これは糸満の豪農が中城御殿から譲り受けたという伝承がある三線です。

久場春殿型は、南風原型の系統をひくもので、名工・久場春殿が創作したと言われています。三線の7つの型の中では、最も棹が太く、天(ちら)の曲がり小さく薄手です。

棹は上部から下部へ次第に太くなりどこからが鳩胸(うとうちから)かはっきりしません。心(ちーがたむち)の付け根に段差が一段あり、そこに三角形の穴が空いています。

(写真提供: 沖縄県立博物館・美術館)

■心



■三線久場春殿型

名工・久場春殿が創作したとされる型で、南風原型の系統をひくものと言われます。三線の7つの型の中では最も太めの棹です。この三線は久場春殿型の代表的な作品の一つであり、重厚で力強い音色を出します。

天(ちら)の曲がり小さく薄手です。棹は上部から下部へ次第に太くなり、どこからが鳩胸(うとうちから)かはっきりしません。心(ちーがたむち)の付け根に段差があり、その下に三角形の穴があります。



■三線久場春殿型



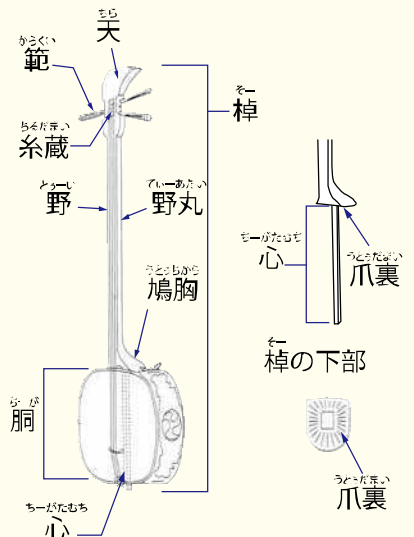
久場春殿は、「久葉の骨型」「久場春殿型」と三線の中で、最も細い棹と太い棹を製作した名工といえるね。

三線 久場春殿型


1丁 全長78.5cm



■棹



県指定有形文化財(平6.3.15)

さん しん
三線 
ま かび がた めい にし ひら
真壁型 銘 西平

1丁 全長77.7cm

この大型の三線は、三線の7つの型のうち真壁型を代表するもので、一名「西平開鐘」とも呼ばれています。

棹は黒檀(クルチ)の上質材で出来ており、形状は真壁型の特徴を備えた、優美な三線です。

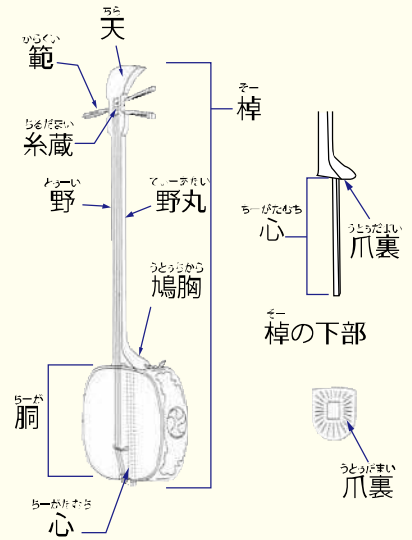
野(とーい)は波型になっており、心(ちーがたむち)の表側に「西平」と刻字がされ、猿尾(みじあてい)には象牙が継ぎ足されています。

製作年代は王府時代と推定され、伊是名殿内から屋部憲通氏が譲り受け、戦後ハワイに渡りますが、近年沖縄に買い戻されたと伝えられています。

【収蔵機関】沖縄県立博物館・美術館



■三線真壁型 銘西平



■心




ハワイの空気を吸っていた三線なんだね。

伊是名殿内から譲り受けた屋部憲通は、沖縄で最初の軍人で、空手の普及に力を尽くした人でもあるんだ。



(写真提供: 沖縄県立博物館・美術館)

県指定有形文化財(平6.3.15)

さん しん
三線 
ま かび がた めい あ むる
真壁型 銘 安室

1丁 全長77.1cm

この大型の三線は、三線の7つの型のうち真壁型を代表するもので、一名「安室開鐘」とも呼ばれます。棹は黒檀(クルチ)の上質材で出来ており、細めで、天(ちら)は中絃掛の範穴(からくいみー)の上部から反り、糸蔵(ちるだまい)が短くなっています。天(ちら)・野(とーい)・爪(ちみ)・心(ちーがたむち)の形状は、典型的な真壁型の特徴を備えており、バランスのとれた美しい三線です。心(ちーがたむち)の左側に「安室」、右側に「譲子孫」と朱漆書きの銘があります。

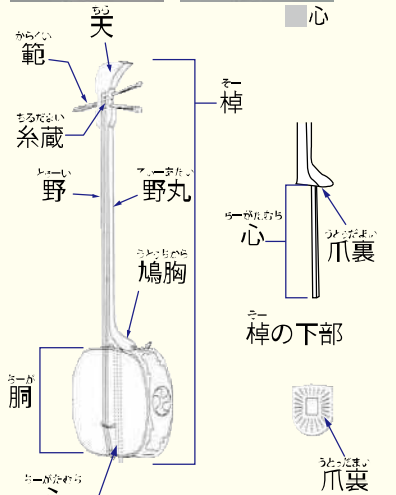
この三線の製作年代は不明ですが、現在の



■三線真壁型 銘安室



■心



持ち主が終戦(1945(昭和20)年)直後、首里から地方に避難した人から譲り受けたとされています。

(写真提供: 沖縄県立博物館・美術館)



幸地亀千代の歌三線を聴いてみたかったな。

野村流の大家として戦後の古典音楽の世界をリードした人だよ。今でも、レコードが発売されているから聴くことができるよ。この三線を弾いて録音にのぞんだかもしれないね。



さん しん
三線
ま かび がた
真壁型

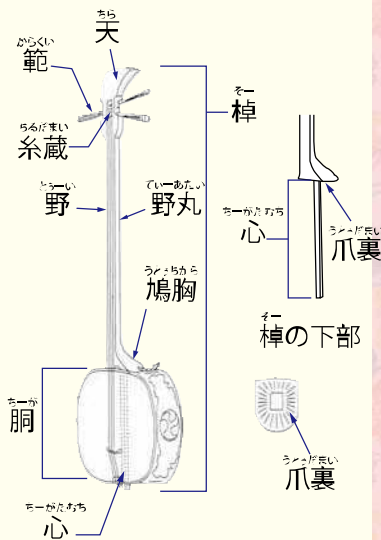
1丁 全長76.6cm

琉球古典音楽の大家である幸地亀千代(1896~1969年)が愛用し、戦前の辻町(現在の那覇市辻)の名器の一つとして伝えられた真壁型の三線です。

棹は赤みがかった黒檀(クルチ)の上質材で出来ており、細めで、天(ちら)は中絃掛の範穴(からくいみー)の上部から反り、糸蔵(ちるだまい)が短くなっています。天(ちら)・野(とーい)・爪(ちみ)・心(ちーがたむち)の形状は典型的な真壁型の特徴を備えており、バランスのとれた美しい三線です。

明治後期に作られたと推定されますが、糸蔵(ちるだまい)内の金箔や漆の塗りは、王国時代の技術に近いものと考えられます。

(写真提供:沖縄県立博物館・美術館)



■三線真壁型

さん しん
三線
うふ ま かび がた つけたり どう
大真壁型附胴

1丁 全長78.3cm

琉球古典音楽の大家である伊差川世瑞(1872~1937年)が愛用したと言われる大型で力強い真壁型の三線です。棹は黒檀(クルチ)の上質材でウズラ目という特徴的な模様が入っています。

製作年代は明治前期と推定され、塗りは古く、天(ちら)の裏側は凹んでおり、範(からくい)は男絃掛がやや上がり気味、心(ちーがたむち)はやや左ひねり、野丸(ていーあたい)は厚く仕上げられ、爪裏(うとうだまい)のノミ型は丸ノミ取りです。

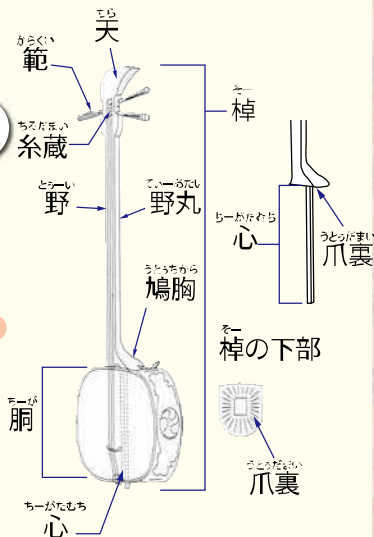
棹に銘はありませんが、胴(ちーが)には、「久米町伊差川大正七年九月十七日」と記されています。

三線の7つの型のうち真壁型を代表するものの一つです。



この三線を弾きながら工工四を作ったのかもしれないね。

伊差川世瑞は、世禮國男という人と声楽譜付工工四を作成した人だよ。



■三線大真壁型 附胴

(写真提供:沖縄県立博物館・美術館)

さん しん
三線 工芸品
よ な ぐし く が た めい た ま ぐし く ゆ な
与那城型 銘玉城 與那
1丁 全長79.1cm

三線の7つの型のうち、与那城型を代表する三線です。

棹は黒檀(クルチ)の上質材で出来ており、太めで、野(とーい)が糸蔵(ちるだまい)の上端まで一直線で、天(ちら)は糸蔵(ちるだまい)上端の先から反っています。範穴(からくいみー)は裏面寄りに開けられ、糸蔵(ちるだまい)は長く、鳩胸(うとうちから)は大きめです。

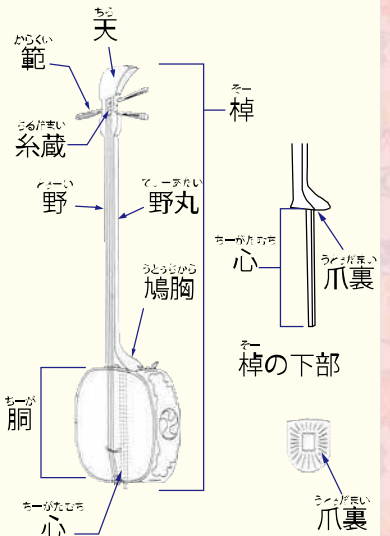
棹は変形がなく、天(ちら)の幅は、典型的な与那城型よりもやや幅広です。爪裏(うとだまい)のノミ型は丸ノミ筋取りで、全体的に均整のとれた三線です。

明治後期に作られたと考えられ、心(ちーがたむち)の左側には「玉城」、右側には「與那」の銘があります。

【収蔵機関】沖縄県立博物館・美術館



三線与那城型 銘玉城與那



心

(写真提供: 沖縄県立博物館・美術館)

さん しん
三線 工芸品
いと くら なが よ な ぐし く が た
糸蔵長 与那城型
1丁 全長78.7cm

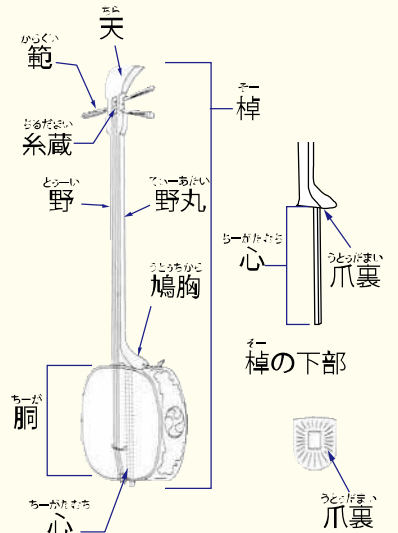
琉球古典音楽の大家である桑江良慎(1831~1914年)が愛用したといわれる与那城型の大型の三線で、王府時代に作られたと考えられています。棹は変形がなく、範(からくい)は均整がとれた配置になっています。

棹は黒檀(クルチ)の上質材で出来ており、太めで、野(とーい)が糸蔵(ちるだまい)の上端まで一直線で、天(ちら)は糸蔵(ちるだまい)の上端から反り、範穴(からくいみー)は裏面寄りに開けられています。糸蔵(ちるだまい)は長く鳩胸(うとうちから)も大きめです。また、糸蔵(ちる

桑江良慎って、
どんな人
だったのかな?



琉球古典音楽の大家で、
野村流の始祖である野村
安朝の高弟だった人だよ。
後に伊楽譜付工工四を発
刊した伊差川世瑞の先生
でもあったんだ。



だまい)が4.9cmあり、通常の与那城型より長いことが、名称の由来になっています。

三線の型を考える上で、貴重なものです。

県指定有形文化財(平6.3.15)



今にも音が
聞こえてきそうね。

古典音楽の安富祖流の大家・金武良十と関係のある三線で、金武家では「時受」ではなくて「宣受(せんじゆ)」と呼ばれていたそうだよ。



三線

ひら なか ち ねん がた めい とき うけ

平仲知念型 銘 時受

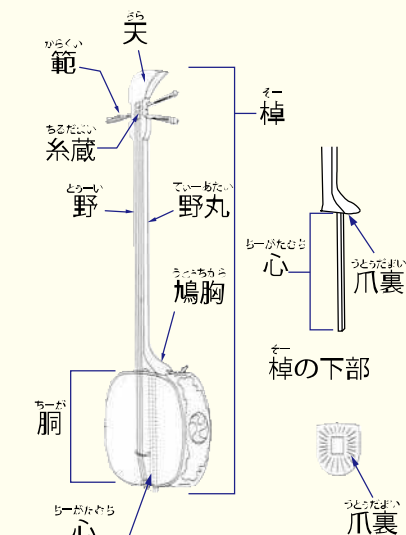
1丁 全長77.2cm

三絃匠主取の知念の弟子の平仲によって作られたと言われる平仲知念型の細身の三線で、明治後期に作られたものと考えられています。

棹は黒檀(クルチ)の最上質材で出来ており、細めで、鳩胸(うとうちから)には丸みがなく、天(ちら)は反りが大きく中央部が丸みを帯びており、平仲知念型の特徴をよく示しています。爪裏(うづだまい)のノミ型は丸ノミ荒取りで、範(からくい)は均整がとれた配置になっています。心(ちーがたむち)の表側には「時受」の銘が刻字されています。三線の7つの型のうち、平仲知念型を代表する三線の一つです。



(写真提供:沖縄県立博物館・美術館) ■心



■三線平仲知念型 銘時受

県指定有形文化財(昭33. 8.15)

久葉の骨型は三線の7つの型の一つで、横から見ると、クバ(ビロウ)の葉柄に似ているところから、この名がつけました。

沖縄の三線の中では最も細棹で、野丸(ていーあたい)と鳩胸(うとうちから)の区別が付きません。名工・久場春殿の作品と言われていますが、久場春殿型と比べると棹の太さがずいぶん違います。

この三線は、久葉の骨型を代表する貴重なものです。



(写真提供:沖縄県立博物館・美術館)

■三線久葉の骨型

三線

く ば ふに がた

久葉の骨型

1丁 全長76.0cm



久葉春殿型と比べると、ずいぶん細く見えるね。



もつとも古い型の南風原型を一回り小さくした感じの三線なんだ。

